



江戸時代の天秤について

江戸時代の幣制（通貨制度）は主に江戸を中心に関東以北は金小判と二分、一分金、後に二朱金が流通。大坂から以西は主に銀使用となる。このため銀は、貨幣のほか「銀何匁」という秤量（重さ）が併用される。

これに必要な銀秤台と分胴などは幕府指定の「銀座後藤」と呼ばれる特権商人によって製作。これが各地の両替商、商家の帳場で相対客を面前にして使用されることもあった。

本器は、その一つで天秤台には、次の分胴（単位は匁）が納められている。

「300.0、200.0、100.0、50.0、40.0、30.0、20.0、10.0、5.0、4.0、3.0、2.0、1.0、0.5、0.4、0.3、0.1匁の17個」

（註）1貫は現在の3.75kgで、その千分の1を匁という。これで上記の分胴は最小が0.1匁（0.375g）である。



季誌  
能古博物館だより

北筑亀井昱元鳳甫著

『烽火日記 卷上』

使用本は亀井昭陽自筆

訓読 庄野寿人

（はじめに）全文、昭陽得意の古文辞文。読みづらく、判読困難な字句ばかりです。現代に通用するものではありませんが、昭陽作『烽火日記』は文章もとり歴史記録として重要にされます。よって一応原文を直読して御認識に供します。

烽火日記（上巻） 天山第三のつづき

十月二十七日、玄雲四集し、まさに雨の来らんとする気配なり。すでに文を草する數百言なるも、未だ朝食来らず。

飢うることも、また宜なる哉。今、我れ雲氣に孤栖して、饋を村民の手に仰ぐ。魴魚頓尾は、もとよりそのものなり。閨中

ただこれ空しく思うのみ。村正、書を求めて郷人の話を受け、我に要する者、五十余、わが臂すでに太だ老れ、筆を提ること

棒の如し。風雨しきりに至り幕を去りて扉を掩う。余曰く「この滂沱をいかんせん」と。幸蔵曰く、「即夜、必ず請わん」と。

余、これを了す。晩に及び、果して少しく晴れる。一蒼頭の提灯を執りて上迎するに遭う。蒼頭快行、予をして覚えず趾を仕

ならしむ。快步躑々として虎に騎る勢あり。履牙、石牙と相撃ちしむ。両足ほとんど相過ぐる能わず。齊の棊、楚の蹶、衛の

輒と一なり。蔡京の子にあらずして、善く走るを学ぶもまた駿なり。司馬温公の言に曰く「山に登るに道あり。徐行すれば則

ち苦まず。足を平穩に地に措けば、則ち跳ぶかず」と。予の従われざるを悔ゆるのみ。良敬、鶏を濡し響す。その妻、觴を

行る。ともに曰く「夫婦の洗腆する、一爵一肉に過ぎず、不恭をいかにと謂わん、君の脱を栄とせざるにあらず、力て能わざ

るなり。請う。少しく進めよ」と。その情、親しむべし。雞を食えば、玉を食うが如し。

即ち、未だ富貴相忘るるの境を踏まず。酒を今夕に楽しむ。なんぞ己むべけんや。その父、春恪、良く飲む。又、深く我が

腹の称わざるを知る。その口、滑稽、科譚百出、人をして哄堂

饋 食べ物

魴魚 一種の淡水魚

頓尾 乾かされて赤くなつた魚

村正 村長のこと

滂沱 雨の劇しく降るさま

蒼頭 召し使

快行 早く歩くこと

履牙 靴の歯

石牙 靴の歯

齊の棊 碁

楚の蹶 楚の蹶

衛の輒 輒

司馬温公 司馬温公

則ち 則ち

濡らす 煮て味つけする

觴 鳥の肝などをいう。料理する

洗腆 丁重にもてなす

脱 脱

栄 たまもの

写真 杉山 謙

笑絶せしむ。春格、連飲して曰く「天子の白駒、空谷に入るも、また時なり。則ち、飲まずして何をか為さんと。主人笑を献じ、客その飲に酬ゆ」定昏に辞して帰る。

夜雨登高、風流大いに過ぐ。我が芳いかな。雞鳴に西郎、予に揺醒して曰く「東方白し」と。戸を出づれば、雲裂けて月なお高し。その未だ又ならざるを知る。白月の白は、豈に白日の白ならずや。誦をやめて臥す。

二十八日 箕伯、馮怒して背振、雷山の嶺々雪を戴く。

繭を重ねて蠢伏す。筆を執れば手戦く。日中、怒り少しく霽む。便ち机に向いて句を覓む。土沛しきりに嚏する。首をめぐらせば、まさに紙索を撚りて鼻を刺す。これを詰るに、曰く「鬱を陶すなり」と。予、これを晒して曰く「小陶は大陶に如かず。その鼻よりせず口よりせよ」と。これに土沛曰く「鼻は独りする所なり、口は則ち待つあり。我れ、豈敢えて子の口を我れの口の如くなれと謂わんや」と。予曰く「そもそも心の妙をいわるは。また告ぐるを以てのみ」と。土沛、追爾として齒を啓いて起つ。酒あるも着なし、酒をいかんともするなし。奴をして豆腐を買わしめ、割いて以て交酌す。

箕伯 風の神をいう  
馮怒 大いに怒る  
蠢伏 虫が丸くなる様  
土沛 昭陽の義弟、山口白貴のこと

追爾 につっこり笑う

昭陽自筆「烽火日記」原本の部分写

烽火日記卷上

北筑 飽弁是元風而若

六岳第一

文化六壬秋八月己丑朔越雨十書至始成廣可  
 六引山子澤冷之名曰禁谷將突人胡事考  
 我所樂也問一曰烽火輪雷之命下司城之屬元  
 先見北狄有警長崎鎮委命肥誠設法傳而達  
 我天山以王山六海道後以龍王裁六岳以東  
 北垣子不崎傳于豐每峰子三人每番十日是  
 役也余與丸山利、善竹次郎者、奔命于六岳王事  
 廢糧驅人如積不使我從吾野擊長崎而歌曰羅文  
 之也嗚呼我法維是名感嗚呼為魔頭又罪又使告  
 離于罪其後二十一日指土垣設治其是船各月机  
 窟亦告乘小西海也飲酒果二十一日朝後復編于  
 澤代溝家語曰母使孫子廢十日茶云子澤因強  
 而復可子澤長門人退讓有十氣附、然而具不可  
 勤之概昔嘗遊余門學成而帰報為政府備員余之  
 為縣次公復致謝諸生曰敬之勉之視于澤猶我焉  
 方飛誌之則曰遠邇耕戶、奔走三吏余為之怒然行  
 里許鄉指一連曰有建之連清員是行二主欲速  
 也喜而鎖之余知其執給也難之不可行既略  
 難三又問之、耘夫、莧子、荒、或百步而止、或五  
 十步而又止、或十步而止、或十步而止、或十步而止  
 俯仰而商議余曰抱臣前走至事為是夫所狂、遠  
 其則何以復能、足下徐試之、情清走乃而出於大  
 路、駭奔到新入、額、日影、未至于、乘、不、行、得  
 遂入、保、長、字、安、會、庄、左、衛、門、辨、兼、具、餘、余、  
 陟六岳左衛門曰僕先且徐、可、可、可、可、可、可、  
 刀而什、二土亦起、及、卿、丁、頓、首、而、跪、於、余、  
 批者無、道、之、夏、馬、傳、學、師、手、斯、汝、好、道、

幸蔵曰く「犬を追う声あり、定めてこれ山家の小郎君ならん」と。これを望めば、肩に捧ぐものあり。手にするものあり。二丈夫なり。三孺子なり。至れば則ち左大夫、労働、および雄や、賢や、知や、満面通紅みな甕に水を飲む。予の方に酣なるを見て、一餐して妙を呼ぶ。孺子、水鶏、包橋、青斑豆、越瓜を以て賄をなし、楮白數十葉を抱き、これを責む。酣なるに乘じ、手を放にして掃広す。大虚の雲、大江の波は天よりこれを形す。我に何かあらんや。西郎、外より入りて曰く、「一長人と三短人と登る者あり」と。予曰く「原土萌にあらざるを得んや」と。これを囑れば、なお一丘に阻てゐる。而して土萌の歩行は、跪跪として知るべし。左大夫、喜びて曰く「妙なるかな。我が酒孤ならず」と。急ぎ入り、四筵四帟を散写し、拵し以て俟つ。土萌、乃ち来る。従者は吉田紀四郎、左谷玄松、いま一人は奴なり。土萌、嘉餞を呈し宮崎大夫の配慮なり」と。二生、紫金苔を饋る。秋月に製する淡水の芳苔にして絶品なり。予、土沛に謂う。「我が餅盤きたり（食満ちて、もう口に入らないの意）折角の嘉肴いかんせん」と。左大夫、乃ち酒三杯を連らねて曰く

満面通紅 顔を赤くして  
おること  
一餐 一度笑うこと  
楮(こうぞ) 葉も実も桑に似て樹皮は和紙の原料になる

土萌 原古麴の字、秋月藩士で南冥の高弟  
跪跪 兕胤のうごくさま  
拵 ほうつ、たたく

吉田紀四郎 号は平陽で知られる。秋月藩士で後に中井門下の秀才

左谷玄松 秋月藩医の筆頭の名手  
宮崎大夫 秋月藩家老

「敢えて以て献ずるにあらざるなり」と。よりに芳助に命ずらく「我が行厨を解け」と。芳助、直ちに弁じ鮮魚湯を搬ぶ。予曰く「ただに急を周うのみにあらず、富めるに継ぐなり」と。左大夫、可々として曰く、「ただに君に供するのみにあらず、己れ供するなり」と。芳助、又一大盤を進む。沙蒜、鱒魚の膾、雪するに苦苣、蘆蕪、白蕪、鹿角菜を以てす。これを聞く、唐山の人、海男子を貴ぶ。驢馬の陰を以てこれを膾するあるに至る。曰く「温補、人参に敵す」と。故に本府に多く、これを長崎より輸入す。漁人、獲りて則ちこれを熬乾す。涎腥零買する者は、誅するあり。よって芳助に戯れて曰く「何において強市するや」と。

(以下省略)

十一月朔 里民、豎に因りて物を饋りにて曰く「芟々たる謝敬なり」と。黄公難、烏婆難、土蕪、菽麥、白豆醃菜、芝麻。田舎の礼物、人をして梱載に苦しませる。童を非岩に走らせ、石の白きものを拵びて、一禁の詩を題す。郷人曰く「筑後上妻部にも、また此の岩と名を同じくするものあり」と。

五雑組にこれあり、曰く「滄州塩

行厨べんとうわりこ

沙蒜なまこ鱒魚ぼら苦苣ちさ蘆蕪だいにん

涎腥零買はけ荷は又はそかに買う

豎小者召し使う子供

黄公難おん鳥婆難めん土蕪いも菽麥そば醃菜つけ菜芝麻ごま

五雑組明の謝敬の者

千鶴山月若也。而甲子而志賀寄峯古見山門猪鬃時下海之激乾也而唐泊吉井常去植場を齋堂齋相祀而脊振而九慮而旭而淫魚柳川之接領而若藤錦糸列を歩陣以南東敵騎行背之山而沃野之廣聚落野民朝若下息茶紫原内恒松長島二村針厩を寄敷也。本郷湯町牛島蓋成二市又南筑路村比是于湯町食既消而酢可解也魚山御酒家前寄其驅政武蕪笑語二土皆自詩中失士前復後日來自我會詞臣于地地別不可後期也巨公士市將之余則防備内後此更疎也自送之不及而返遂即覺則二經酒龍于枕頭士沛曰中村意市至自二日市折搗赤情字已在室中五引時之珍感良歌亦不期而會大吹之後幸感共河橋云

日賤女子意又饒之交散也引紐鳴雙平鼓嗚于林陳世所謂神度也也抄書屋文一百餘語

十一月朔里民因慶饋物曰交謝敬黃公難鳥婆難土蕪菽麥白豆醃菜芝麻田舎禮物使人入於梱載走童非岩拵石白蕪菽麥土蕪曰菽麥後上妻部亦有與此若同者難組有之曰涼川鹽山有即子城一童童城相傳徐福將軍也女橋若於此而福之入海不由鹽山後人戲謂其名耳位上猶說我邦也日中代人來達刺始

東津林標皆為讀之一回西下妻部送我一日而村正良吉饋丹紅餅亦是湖上幸藏我思以思以日入謝西郎子傳菽麥亦十豆謂曰是後也之不受笑使使使消消不不若自其出上山福心之遊不及也此之遊大樂也洞窟嶺山向似亂之遊其樂也耶假樂之天而前為達子百道林

烽山日記卷上終

山に非兮城あり。一に千童城と名づく。相云う。徐福、童男女とともにここに僑居す。而して福の海に入る。塩山に由らず。後人獻れに此の名をなすのみ」と。かの土すらなお然り。況んや我が邦をや。

日中、代人來り、烽制始めて定まる。法規示標みな至る。これを讀むこと一回、すなわち下る。喜平、我を二日市に送る。村正良吉、丹雄鶏を饋る。またこれ潤筆なり。幸藏、我を比恵川に送る。日入り、西郎に博多に、土沛に呉門に謝して曰く「この役や、賢の笑を愛まざるを以て、僕をして哈々嬉々として日夜を消せしむ。ただにその口より出づるが若きのみならず。上仙福地の遊も及ばざるなり。これを淘羅嶺上に強笑嘯呢して、面の靴皮に似たる者に比するに、それいかんぞや」と。ともに一笑を發して別る。

黄昏、百道林に達す。(以下、後文略)

代人交替番士のこと

村正良吉庄屋をいう潤筆書を書くこと

嘯呢へつら笑い

亀井家は、再度の火災に遭い、城下に住むのを断念し百道の松林近くに居を移しました。よって「百道林に達す」は帰宅した意になり

おことわり。昭陽の「烽山日記」は、自ら得意とする「古文辞」を自在に用いて延々とつづきます。当時の漢文社会にあつては容易に真似されないものであつたでしょうが、一般に通用する文章でなく、学界もとよりこの種の擬古文は敬遠しています。

本誌は、亀井昭陽の学識、漢字の深遠を紹介するため敢えて掲載をしました。何卒、ご了承下さい。

## 老子終講

安陪光正

## 二八観音

能古の棧橋から博物館までは歩いて十分、階段を登る近道と永福寺の境内に沿っただら坂の廻り道とがある。今日は春の日を背に、永福寺の境内を通った。この寺は曹洞宗金龍寺の末寺で、能古出身の画家多々良義雄の歌碑や敗戦後間もなく遭難した能古渡海船の慰霊碑「二八観音」を祀る。今日は、等身大の観音像に立ち、台座に刻まれた文字を読んだ。

うなそこに眠れる二十八の御霊よ  
安らかに眠りたまえ 風強き日は  
風静めよ 波荒き日は波静めよ  
今歳老いしその妻が 今成長のそ  
の子らが ここに碧海の丘に涙す  
るを慰さめよ 島秋にして稲の実  
りのたわわなれば 柿の実りの美  
しければ 御霊よ安らかに眠りた  
まえ

福岡市長 阿部源蔵

これは昭和二十一年秋、能古渡船  
転覆遭難者二十八名の霊を慰め、航

海の安全を祈って、その遺族らによ  
り、昭和四十三年十月五日に建てら  
れたものである。

## 渡船転覆

昭和二十一年十月七日の西日本新  
聞は、残ノ島渡船転覆事故を次のよ  
うに報じて  
いる。

「乗客を満  
載した渡船  
が夕闇の海  
上で顛覆、  
溺死者二十  
八名を出し  
た椿事が発  
生した。五  
日午後六時  
半頃福岡市  
姪濱、残ノ  
島間の渡船、発動機船第二能古丸  
(十一トン) 船長木村由太郎(四九)  
が乗客九十二名をのせて残ノ島に向  
う途中、残ノ島東方一キロの海上で  
突然船尾から機関部に浸水しはじめ、  
乗客が先を争って海中にとびこむう



二八観音は静かに我々を見下ろしておられた

ち、船は左舷から顛覆した。瞬時の  
出来事であったのと寒さのため犠牲  
者は意外に多く、急報によりかけつ  
けた米軍マリナー内火艇二隻が、闇夜  
の海上にサーチライトを照らし救助  
に活躍したのをはじめ、博多港・西  
福岡両署、警防団、救難組合などの  
必死の救助作業も空しく、六日午後  
五時までに死者二十六名、行方不明  
二名を出した」  
遭難の原因は、同日午後三時姪濱

発の渡船が機械故障のために欠航し、  
最後便の午後六時発の同船(定員四  
十名)に乗客九十二名と船員四名が  
乗船して出航したため、定員オーバ  
ーで浸水転覆したものである。生存者  
の話によると、

「あの夜は風波はなく、残ノ島の  
手前十町ぐらいいのところで船尾の方  
に客が多かったため浸水しはじめ、  
客がさわぎ出したかと思うと船は左  
に傾いたので皆一斉に海にとびこみ  
ました。海面には沢山の油が流れ、  
これを飲んで死んだ人も多い。赤子  
を負ったお母さんが、赤子を海面に  
差上げたまま沈まれたのを見ました  
が、あとは夢中で島に泳ぎつきまし  
た。あの最終船が二回運行してい  
たらと思います」

当時国立筑紫病院に勤務していた  
私は、この報を新聞で知った。能古  
島に知人がいたので時々渡船に乗っ  
たが、昭和四十年頃までは十トン前  
後の小さな船で、昔の姪濱棧橋から  
出ていたのを覚えている。

## 正言は反するが若し

今日の老子は七十八章からであつ  
た。この章は小川環樹の訓み下し文  
によると、

『天下に水より柔弱なるは莫し。  
而も堅強なる者を攻むるに、之に能  
く勝つこと莫し。其の以て之に身う  
る無きを以てなり。弱の強に勝ち、  
柔の剛に勝つこと、天下知らざるは  
莫くして、能く行うこと莫し。是を  
以て聖人の云わく「國の垢を受くる、  
是れを社稷の主と謂う。國の不祥を

受くる。是を天下の王と謂う」と。  
正言は反するが若し』

前半では柔弱なる水が、堅強なるものに勝つ、いわゆる「柔よく剛を制す」ることを説く。水については第八章に、『上善は水の若し。水は善く万物を利して而も争わず。衆人の悪む所に処る。故に道に幾し』、水は万物をうるおし、恵み育てるのに自分の力を誇ることがなく、下にいて恭謙である。そのような無為自然が道に近いのであろう。現代は自己主張の時代で、自分を前に前におし出そうとする。それとは反対に、謙讓を美德として道に近いと考える。この章では、「水は方円の器に随う」という水の柔軟性、不竞争性、無為自然が、よく剛に勝つことを述べている。

一般に王は、富と権力を持ち、富貴な生活を送ることが出来る。王が国の垢を一身に受け、国の災危を引き受ける人であってこそ、真の王であるという。このことは「柔よく剛を制す」と同様に、真理にかなった正しい言葉は世間の常識的考えと反対のことを言っているようである。『正言は反するが若し』とは間々耳にする言葉である。

今日の講義は、最終章(第八十一

章)で終った。

『信言は美ならず、美言は信ならず。善なる者は辨せず、辨ずる者は善ならず。知る者は博からず、博き者は知らず。聖人は積まず。既く以て人の為にして、己は愈いよ有り、既く以て人に与えて、己は愈いよ多し。天の道は、利して而うして害せず、聖人の道は、為して而うして争わず』

真実な言葉は飾られて美しくはない。飾られた美辞麗句には真実味がない。善人は議論しない。口八丁で言葉巧みな人は真の善人ではない。知る者は博識ではなく、博識の人は真の知者ではない。聖人は自分の為にたくわえず、ことごとく人の為にして、自分は益々豊かになる。ことごとく人に与えて、自分は益々多くなる。天の道は人に利して害することがない。聖人の道は人の為にして功名を他と争わない。

『老子』の中には、善人とか聖人という言葉が随所に出るが、麦谷邦夫は道の体得者、実践者と書いておられる。彼らは、人の為にし、人に与えて、己は益々豊かになる。母の子に對するような報いを求めない愛報いて求めない施財こそが、己の心を富ましめる、そのようなことかと

思いながらこの文を書いている。  
『老子』は暗示的であり明言しない。老子をして『老子』を語らしめることができない今日、各人各様の解釈が成り立つのであろう。

蟹の甲羅

福田 殖教授による月一回(第二土曜日)三年にわたる「老子講義」は、能古博物館野理理事長のご配慮により、毎回楽しく受講することができた。姪浜発十二時十五分の渡船に乗ると、先生も十二、三人の受講生も皆一緒になる。最高八十九歳、最年少二十五、六歳といったところ。女性が四、五人である。先生や若い方々は船賃の往復三八〇円がいるが、私たちシルバー手帳を持った者は無料である。手帳を忘れると料金を取られることもあるが、白髪頭を見て「この次は忘れないようにしてください」と言って切符をくださる方もある。改めて手帳を見ると、市の施設である動・植物園、市営渡船は無料だと書いてある。時にはこの船に乗り遅れ、片道五〇〇円の海上タクシーで駆け付ける人もある。

船は十二時半に島に着く。棧橋から博物館までの近道は十分、昼食は館内林間の小亭でいただく。かしわ飯に能古うどんが多い。一衣帯水の

この海によって、能古に自然が残されていることは有難い。四季折々の移ろいを眺めるだけでも洗心の情を覚えるが、まして老子を聴くにおいておやである。

福永光司先生は、『老子』のあとがきに、「蟹は己の体に似せて穴を掘るといふ。わたくしのこの老子訳解もまたその例外ではあり得ないであろう。ことさらに己の体に似せて穴を掘るつもりはなかったが、できあがった穴はまぎれもなくわたしの体のそれである。これをおのずから然るものというのであろう」と書いておられる。

老子という大海の砂浜に掘られた先学の色々な穴を、今我々は容易に見ることが出来る。掘られた穴のまわりやその壁面にキラキラ光る砂や七色に彩どられた貝の色々を見るように、講義によって煌々章句の数々を学んだ。

それは、「不言の教」、「和光同塵」、「無用の用」、「不善の人は善人の資なり」、「足るを知る者は富む」、「為して而も持まず」、「禍や福の倚る所」等々であった。しかしこの理解に對しても、老子を学ぶ我々の心は、己が甲羅に相応した心をしか持ち得ないのである。

# 『守舎日記』

亀井少梨

夫の雷首が生月捕鯨業の益富当主病氣診療に出張した留守日記

辛卯夏「天保二(一八三一)年夏四月十五日」

午時、夫君(雷首)が平戸藩領の生月に赴く。益富又右衛門の病を診るためである。

姪浜の紙屋太次郎を同行、太次郎は益富氏捕鯨の仲卸しを得ており、是非見舞いする、と。これに生月から迎えに来た益富家の下僕が従う。

およそ、滞在十五日の予定である。友(少梨のこと)は、妹の宗(昭陽子)の未娘で、陽子女七人の末女)と、医生(夫の医術弟子)の宗吾、竹五郎、秀五郎

これに下男の源次が我が家を守ってくれるので心強い。これらを新地(西新の実家)に手紙を託し知らせる。

葉屋の徳次が加来玄圭(医師で夫の友人)の書翰と自分に笄(女性の髪飾り)を持参する。

長石村(少梨居所から西十軒余)の成山(夫雷首の従兄)来訪、手土産に茶と菓子などくれる。

宗吾を北原(西一軒の集落)に往かせる。これは夫君が出発前の指示。

源次を西瓜畠の水利に行かせる。宗吾の母が留守見舞いに来る。

阿八が青梅花を持参。萬蔵も留守見舞いに来る。

夜、左利来り囲碁。

(註)少梨が囲碁をする記事は初見であるが、夫の雷首も好みであった。留守中は再三、かなりの碁打ち客が来訪する。

○十六日。天晴、後に曇る。

雷三から来客あり。不参の知らせがとどく。

宗吾、秀五郎を「二宮社」に留守中の恙なきを祈念に行かせる。源次は西瓜畠に往かせる。竹の母おくに見舞いに来る。源次娘の功もくる。

夜、萬蔵、又平、増次、佐助、利助が囲碁に来る。この内の増次が言うに「先生旅行中は、源次に晝寝させておき、夜は起きているよう用心させなさい」と。

これに少梨は「この茅屋に何んにも有りはしないよ。それに若い勇者(書生たちのこと)も多くいることですから!」御心配なく、と。

宗吾、秀五郎に日課の訓讀を教える。庄屋の長三来り、孕婦券也堀り取り

○十七日。曇り、風あり。余(少梨の自称)、朝方、再度睡

する。起床すでに日は高い。姉丈の重左衛門君が末娘の宗のために来訪。本日は東照宮押花会に行く、と。茗菓(ショウガを使った菓子)を土産

に、二日後に帰宅する、と。

孕婦券(現代の妊産婦手帳)もあるまい。  
姉丈(末娘の宗からの呼び方であるが、姉の世が福岡藩士の宮井氏に嫁しており、その縁故者と思われる)

茅屋(わらぶき)の根のあばら家

源次の曰く。昨日表を掲げり、曇天のため精を得ず。他は異常なしと。友曰く。新地(実家)に往き、

両親の安否を問ひ先祖の墓参したい、と。よって塾中の諸童子をして山に陟らせ躑躅を折らせて束ね艾と芹を奠麴に添えるなど荷作りをさせる。

此の夜、長公を夢にしたが、まさに忌日であった。献花を用意しており甚だ幸いとした。塾生に二宮社に参拝させた。お千たちが水を汲んでくれる。午後になるも風止まず。

思うに今日、夫君は平戸を発し生月島に渡海である。

余は昨年、夫君に従って日本の西海を渡った。海は沖合はるか天に合して風無きに波を起こす。真に鯨の横行、潮汐の廻還、人をして魄を失わしめ、余は是れに愁然たり。安泰を願ひ酒を献じ祈るのみなり。米治

来り竹五、秀五をして索麴をもたらし七たび道遠き命に賭祭るとす。

猪三、浪華の画人(碧山)なる者を連れ来る。これに儒、書と画、い

ずれも恙無くしておりますと挨拶して書画三枚を与え、其人の画三枚を受けた。佐助、献花を持参。屋に入らずして帰る。

宗吾、雷三、秀五に授業する。順古、人に託し魚ずし十六を持参

東照宮(現西公園)の光雲神社近くにあった

曇天云々(思うように仕事がかどらなかつた意)

奠麴(麦粉の平打ち餅を供えたのをいう)

少梨は益富家に招待され、夫雷首と同伴生月に渡った追想を云う

するも其の事情を知らず、偶々宗吾側たまたまに在りて柴胡さいこを刻む。曰く、此の雷君、孟子卒業なり。余、曰く、一卷を畢りて先生を餐す。ただ、吾子わがこと竹五郎のみ、どうして余に告げざるや。此の如きは外来生をして必ず觸れん。夫子の怒るも、小子が勧めに非ず。前に尚書を卒おえ、竹五も蒙求もちもとを卒おえて連日酒食を具たう。雷三食後に何故かを問う。これに讀書終えて先生に饌けすは、是れ、卒業を謂う、唯ただこれのみ、強いるに非ざる也。之を招くことなく来る者は何れか意を足す。これ幸いとて望むな母れ。阿八、饅頭四十五を奠す。

夜、妹宗と宗吾、竹吾、秀吾、「釣饅頭」を為す。釣饅頭は糸を以て饅頭を繁かぎ、之を梁上に懸け、以て両手を握り両足を膝行して之を喫する。或は膝中足となり手を用いず一足もて立つなり。阿国その声を聞きて来り、又、角力を為す。

六治来り、月初に肥前武雄に入湯し今日帰るなり。佐助、儀平来って囲碁する。原次、歸りて母の語るを伝え曰く、近頃、平戸の駿太郎兄弟来らず。粉繁の故か、書面に返答もなし、と。満堂平安なり。縣氏（平戸藩士）まさに好音亭（今宿、少柴家の雅号）を来訪さる。縣氏は勇猛

柴胡さいこ煎薬の類か、意不明

蒙求もちもと儒学の初級本

奠すた仏前に供えること

釣饅頭てうまうず遊びごと

の士なり。

又、故態あり。我まさに之を避くべし。原次、曰う「県公、如何人か。常に醉態あり。なんぞ来るや」。これに曰く「友君の使いなるか」笑つて入り高談、雄辨震るうが如く怒るが如く、傍若無人、意気当たるべからず。（以下本文五行省略）

○十八日。辰牌、雨や、遏む。

雷三、躑躅を奠す。中津惣右より鯛魚を贈られる。書画十枚を乞われる。儀平が書画を乞うに三百鈔を一封とし名前の所に潤筆を乞う。此の料紙も他人の乞う所なり。我家は既に月餘を以て依頼を謝絶しており、斯る小人の非礼を惡むのである。

而して学者、食禄者は之を知らず哀しき哉。徳正、佐助、儀平ら囲碁に来る。猪三、萬歳、惣次来り、原次は煙草を巻く。嘉平、惣次は魚鮓七塊を留守見舞とする。晩、鉄五来るに食事を供す。終日、曇る。夜、妹宗等と坐談。これに阿国来り加わり腕角力する。勝つ者なく、宗吾、友に救いを乞う。友よつて之に當る。宗吾また抗する能わず。皆手をたたいて歎ぶ。しかし友は頭痛、心悸しばらく言葉も出ず。

熊吉来り明日姪浜に行く。これに蠟燭三斤の購入を頼む。利右来り

故態こたい悪いくせもある

食禄者じきりくしや大名に仕える武士のこと  
徳正とくただ村長のこと

心悸こころおそ心臓の鼓動

囲碁。毎夜、童子驚いて云う。道遠く来る。便所騒動笑うべし。三童に訓讀を教える。月、まさに中天、即ち寝む。本朝、雷三、阿安、奠菊を植える。本日、阿国も来る。

○十九日。晴天。朝、県氏来る。家中、掃除し、髪を梳く。阿国母来り菓を奠す。青菜漬を持參。長石の新六、成山来る。成山に初花茶一袋、砂糖を贈る。猪三、宗吾旧婢来り梅、紫蘇を持參。雷三も梅くれる。道太郎走り告げて曰く老夫子（父昭陽のこと）駿太郎と突然に來遊なり、と。即、筆を投げて走り出る。敬助曰く、未だ生ノ松原より先なり。余、驚喜し手舞い足踏むを知らず。敬助曰く、先生の命なり、行厨一つも労心する勿なれ、と。童子をして出迎えに走らせ、則ち父の姿が見えたらすぐ先に帰来せよ、と。余は妹と敬三、道太郎を指図して掃堂（部屋掃除）を命じ、原次には御茶の用意をさせる。順榮、萬之助良益（父の書生たち）弁当を担い来る。すぐ、妹の宗と阿国、道太郎は門の先に出て迎えさせる。やがて一行の元亮、烟順、玄柱、順忍、政之助、伊三郎（皆亀井塾書生）が着く。これで玄関前は雑踏する。この間、先に出していた童子が走り歸り隣家

奠菊たを植える指し木すること

駿太郎しんたろう益富氏の長男で平戸藩士知行三百石の子弟、亀井塾修行中

行厨ぎやうしよ云々食事の心配はいらぬ、と

能古博物館だより

の東角に控える。父は、妹の世、隣家の阿勇、平戸（生月）の駿太郎、その弟三郎と顕民に一婦一僕を伴い、間道（協道）を歩き来られる。迎えに出た阿国、道太郎が従う。余は、これを見て、涕涙（涙が出ること）し言葉も出ない。革卿、駿太郎が父の後に着き、紅女（前年亡くした少栗の娘）の位牌前に香典一封を供え、索麵一箱と金二両、これに唐紙半裁六枚を贈られる。一同、霊前に拝した後に着座し、持参の行厨を開かる。酒肴すべてとのうを見る。父は、部屋の襖を取払い、好音（少栗塾をいう）の全員にも坐に着かせ、すぐ宴に入る。まもなく酒たけなわとなり、敬介が立ち舞いを始めると、駿太郎も勇壮な剣舞を見せ、同飲を盡くす。好音は供するに一物もなし。幸いに宗吾の父、鶏卵十一顆持参。宗、すぐに煮て飯に添える。客、皆な酔い技芸も盡く。則ち饅頭釣をする。友は先に出る能わず。十数人争つて出る。其の進退、一坐大いに笑つ。伊三は勇壯にして質朴、身体強剛、其の風奇なり。駿太郎は数々出るも能わず。敬助頗る巧みなり。

日、將に申牌（後四時）。父上、駿太郎を伴い帰途に就く。革卿をして門生を率いて之を送る。余、独り

金二両 現在の価値にして五拾両相当  
紅女の追善に娘少栗に与えたるもの

茫然久しくす。撫然とし嗚呼、天いまだ友を遣らずとするか。紅すでに小祥を過ぎるも、父上はなお之を傷まわれて今日此の行を為されたるか、其の恩情は天に至り慈愛の厚き感佩盡きるなし。乃ち坐して香を奠す。大人（父のこと）既に去り敬助四人を先にして守る。順忍、良益、政之助、駿太郎は次に、お国は遠地であるので別に送る。

朝、惣助は山茶花三根を鉢に植える。保利元亮の門人、儒書を持参。明後を以て期すと。夜、萬蔵、佐助来り、困暮。お國早朝、福岡に行く。これに書翰して托す。朝、秀吾お塩い取り

○二十日。天清し、童子拝神する。猪三、博多に行くと来る。宗吾、之に鞍屋の菓を頼む。佐助来る。時に余、襦袢など洗い糊付けして干す。梅三升を価七十二文で買い、宗吾に一升を分ける。鹿門生の書画二枚を写す。晝過ぎ天陰る。六治、又平阿兆ら来る。源次、米を搗く。暮に阿国が持参した世子の返輪来る。

儀平来り困暮。秀吾お塩い取り。

○二十一日。天清し、童子拝神す。雷三、躑躅を奠す。皆、拾着を禪衣に改める。寒衣を濯干す。源次は西瓜島に行く。竹母と妹宗と機をす

紅少栗の女子、七才で昨年没  
小祥 一周忌のこと

写す 本稿で書す。画くこと

奠す 仏前に供える  
機 手織り又は足踏み織り機のこと

る。正月餅の角切を砂糖漬にする。萬蔵と阿国が来る。夜、佐助、萬蔵、阿国が来り困暮。佐助曰く、明朝福岡に行く。余、書を托すと云う。日記三枚を書く。阿国来り云うに三女と福岡に行く、途中墓に参る。猪三来り画数枚を見せる。

○二十二日。天清、童子神拝。

雷三、豌豆一籠を持参。佐助に書と豌豆を新地（父家）に托す。源七来り懐婦證據に加判して与える。源次、麦を搗く。惣助、水綿花、躑躅、薊を奠す。猪三、諸唐紙十枚をくれる。夕刻前、佐助、福岡に帰ると。これに鉛を奠じ、世と宗（少栗の西妹）に薬を托す。大人（父昭陽）書輪来る。少祥後に少しく留守をしていたが平安である。又、訪ね往かんとする。夫子（雷三）の帰るも近きにあり。守舎よろしく火の用心第一にせよ、と。治六、大根を送りくれる。宗吾君より豌豆、弥助母より櫻桃、これ此の母毎年のことなり。熟すを待つて紅児の好むもの。いま半熟なり。これらは辞するもならず、嗚呼。紅也は人に好まれ、老若男女皆な唯我を好むとす。故に其の霊前は供え物が常に丘積みとなる。阿兆来る。丁度妹宗も好音亭にあり。機織を好む。余も注意して見る。（次号につづく）

丘積み 丘のように盛り上げる



# 維新勤王事蹟 (2)

(久留米藩の勤王事情)

明治三十九年 莊山敏功(談)

本誌前号につづく、当館賛助会員 莊山雅敏氏による御祖父遺稿です。

諸方有志の来訪、これに地元の書生たちも勤王攘夷の志を固くして愈々泉州先生の上京には是非共同行を願うとするものが多くなった。

これに泉州先生からも内々の相談があり、その相談とは即ち命貰いの相談であった。私共は、素より先生の為には命を惜しまぬという決心を持っており、皆な奮起して先生に命ぜられるならば水戸の浪士十七人が伊井掃部頭を斬る位のことをして見ようと思っていた。

しかし、何の為に死するか、死する目的がいま一つ確信がないので、一同で泉州先生に向って其の目的を尋ねた。

これに泉州先生は目的を聞くに及ばぬ。命を貰うというても決して大死にはさせぬ。

いまは機密を決して漏らすことは出来ぬ。

この事は、自分と平野次郎、大久保市蔵と共に謀って居るから決して心配に及ばぬ。いま話したとて分か

らぬ。今日、日本を改革して徳川氏を滅ぼすということも一寸六か敷く、又御親征と云うことも出来ぬ。

薩州か長州が犠牲にならなければ、到底日本改革は出来ぬ。

久光公が上京されるからは自分も共に上京する。而して京都所司代の酒井雅楽頭を斬らんとする。

久留米の同志も脱走する外なし。自分は幽囚の身であるので脱走する。

実は血判でもなさしめんかと思われ共、子弟の間柄であれば夫れには及ぶまいと思う。それで此事は決して他人に漏らさぬと言われた。

此の命貰いの相談は実に容易ならぬ相談であった。又、上京する事について宮崎土太郎、淵上謙三等は、京都は何処にあるやらも知らぬために種々の話がでた。ヤレ京都に行くなら京都見物も出来るかヤ、面白

いなどと笑ひ興じたこともあった。すでに酒井雅楽頭を斬るとい

うとが決められてからは、泉州先生の教えも一層烈しくなった。角力か、剣術、柔術をやるか大変な事にな

て来た。剣術も竹刀では間に合わぬとなつて、大刀を抜き夜分に素振り

を始めた。その素振りは、真剣を振りおろす音がヒュー、ヒュー／＼と

音がするまでしななければならぬ。

皆、仲々に音が出ぬ。それで皆な一生懸命、盛んに稽古をした。

愈々、翌春に脱走すると定まった。其頃には、幕府が諸藩に命令して諸事に取締りが厳しくなり、新年を迎えたと実行の手順も定まった。

大鳥居理兵衛は体重百五十斤(78kg)あり、肥満のため歩行が困難で、一行におくれ迷惑になつてはいかぬと先に上京出発されることに決まった。

理兵衛先生は、兄の泉州先生幽囚を預かり居られることもあり、自ら脱走ということは事を大きくすると

考えられ、天満宮々司という社事のため藩社奉行に願ひ、公用として堂々と二月十日に出立、これに次男管

吉および宮崎土太郎を随行とされた。又、必要な兵器類は長州藩より現

地に先送りという約定もあり、十三日に淵上郁太郎が水田を出発、長州

經由で上京となった。こうした動きも藩の監視するところとなつて、捕吏が諸方の街路を塞

ぐという噂も出る始末で、仲々に泉州先生の出発は困難になった。

理兵衛も郁太郎も既に出立しており、泉州先生の苦心惨憺は大きくなるばかりである。

斯くして十四日になった。既に、理兵衛、郁太郎の脱走も捕吏が知

て警戒は益々厳しく今や四方の路すべてが塞がり、出でんとするも出られず、泉州先生の苦心は一方ならず、私共も立ち後れとなり心は一刻も早く出立せんと、その準備に大刀はじめ旅装の用意は万端であった。

然るに泉州先生は、私共を制して自分独りが先手に脱走する、皆は其後に立せよと言われた。私共は、先生に後れるなど其の残念は、口に

言えぬ程であったが、仕方なかった。十五日晩、泉州先生は闇夜に脱走と決定、そのため書類を焼かれた。

当日未明(十六日の夜明け前)私と下川根三郎で捕吏の警固を見に出たが、いづれの方面も厳重であった。

泉州先生は、最早や、猶予すべき時ではない。路を妨ぐ者は斬つても出でんと決心せられた。

愈々、泉州先生出発に従行した者は淵上謙三、吉武助左衛門であった。謙三は槍を持ち、助左衛門は銃に火

縄を二つ付け、これに火を付けたまま、打ち振つて銃をよく見せて、捕吏を威嚇するためであった。

いよいよ時刻が迫り、泉州先生出発には、家門でお見送りした。

その時、泉州先生は、私共に向かわれ、君らを置いて先行するのは真に残念に思うが、能く余が心を酌め

能古博物館だより

よ。君らを此処に止め置くは余の本意にあらず、実に已むを得ない事情を諒とせよ。

今日夕刻には、豊後の小河弥右衛門、田中河内之介も来る筈である。この兩人が来たならば、兩人に伴なって上京せよ。それまでは必ず待ってくれよ。此処にて別れるが、この先の見送りは無用であると言われ出立された。

泉州先生の順路は、水田から本郷に出れば人多く、捕吏の警固も余程面倒と思われて、下妻の路を取られた。前に話した如く、泉州先生は大

刀に手をかけ、謙三に槍を持たせ、助左衛門に鉄砲を持たせており、誰一人これに敵す者なく、捕吏の方が恐れて近くによらなかつた。後に謙三の話であったが、後に残った根三郎や私は実に泉州先生に随行できなかったことを残念に思いました。

しかし、前後の状況から考えて仕方なかつた。後に、久留米の有志は既に出立したことも聞き、益々口惜しくなり、広い大鳥居の家に入って、寝たり起きたりしておると、晝過ぎ頃に菊四郎が大鳥居家に来て来た。菊四郎が父上の出立を聞くので、もう出発されたかと答えた。実に残念と言つて其の順路を尋ねたので、

下妻の路を取つて南関に向かわれたと答えると、今から後を追いかん、下妻の路を聞くので、根三郎は至つて性磊落の気性であるため、然らば自分が下妻橋まで案内せんと、しかし帰り道にて捕吏に捕縛されるかと。心配しながら菊四郎を伴つて来た。

果して其の帰路、折地で捕縛された。私は其前に帰宅しており其事を知らなかつた。後に根三郎から委細を聞いた。

私は家に帰つたものの、心が転倒して、いままでのことが何が何やら一向にわからず、母の顔を見たり、ぼんやりと火鉢の側にいたところ、突然二、三十人の捕吏が、私の家に来て「御上意！」と叫び、私を捕えて猿轡に縛り、手錠を掛けた。此の時は実に残念を思い、此時は親も家族も泣いた。

泣いたとて捕吏が許す訳もなく、私は庄屋源助の家に連れられて行つた。「此処に控えておれ」と。

私を捕えた人は、今村新平、古賀寿三郎であった。(実に憎くて溜まらなかつた。今でも其時の事を思うと兩人の顔が浮び出て来ます)

暫くして根三郎も捕えられて源助の家に来た。根三郎の顔色は蒼然

龜陽文庫・能古博物館友の会

- (福岡市) 玉置貞正(7)・西島道子(3) 西嶋洋子(7)・木戸龍一(7)・吉原湖水(7) 岡部六弥(7)・村上靖朝(7)・星野万里子(7) 吉村雪江(7)・桑形シズエ(7)・田上紀子(7) 安松勇一(7)・上田良一(7)・高田浩二(7) 桑野次男(7)・石橋七郎(7)・藤木充子(7) 和田宏子(7)・板木継生(7)・行成静子(7) 鬼塚義弘(7)・中畑孝信(7)・片岡洋一(7) 石川文之(7)・橋本敏夫(7)・山内重太郎(7) 都筑久馬(7)・齋藤 拓(7)・横山智一(7) 古賀清子(7)・宮崎 集(7)・西 政憲(7) 天谷千香子(7)・原 重則(7)・岩下須美子(7) 岡本金蔵(7)・三宅 碧子(7)・星野金子(7) 林十九楼(7)・有松陽子(7)・宮 徹男(7) 安永友儀(7)・織田喜代治(7)・上田 博(7) 鶴田スミ子(7)・速水忠兵衛(7)・西村忠行(7) 西川真澄(7)・青柳繁樹(7)・磯崎啓子(7) 伊藤康彦(7)・寺岡秀實(7)・原田種美(7) 奥田 稔(7)・坂田泰滋(7)・若重二郎(7) 桃崎悦子(7)・大神敏子(7)・石橋清助(7) 塚本美和子(7)・大山宇一(7)・長八重子(7) 隈丸清次(7)・井上敏枝(7)・葉山政志(7) 川島貞雄(7)・岸 洋子(7)・柳山美多恵(7) 久芳正隆(7)・吉富とき代(7)・半田耕典(7) 武藤瑞(7)・(4)・浜野信一郎(7)・古山雅敏(7) 森本憲治(7)・平河 涉(7)・墨 羊子(7) 長尾茂徳(7)・吉田博子(7)・波辺美津子(7) 神戸純子(7)・山田博子(7)・佐藤泰弘(7) 原 敬道(7)・前田静子(7)・黒川松陽(7) 野田はつ(7)・荒谷幸子(7)・矢富謙治(7) 林野 聡(7)・飯野 晃(7)・吉岡克江(7) 神野 祥子(7)・星野 玄(7)・吉藤卓哉 藤野清春(7)・井手俊一郎(7)・増田義哉 田里朝男(7)・池田修三(7)・黒田喜美子 江頭 藤子(7)・吉田 修三(7)・黒田喜美子 榎 藤子(7)・宮嶋熊太郎(7)・土井千草 富永紗智子(7)・松阪洋昌(7)・守瀬 孝二 (前原市) 由比章祐(5)・衛藤博史(1) 福 永(7)・大野城市(7) 伊藤泰輔(7) 田代直輝(7)・執行敏彦(7)・久野敦子(7) 渡辺千代子(7)・坂井幸子(7)・春日市(7) 後藤和子(7)・筑紫野市(7)・脇山浦一治(7) 川浪由紀子(7)・横溝 清(7)・足達輔治(7) 川田啓治(2)・(太宰府市)・佐々木 謙(7)

- 中村ひろえ(7)・古賀謙二(7)・西尾弘子(5) 平岡 浩(4)・野尻敬子(2)・蔵田はつ(7) (筑紫郡)・結城慎也(5)・(柏屋郡) 橋田正己(7)・神崎憲五郎(7)・青木良之助(7) 松本雄一郎(7)・神崎憲五郎(7)・友野 隆(4) 鈴木惠津子(7)・上杉 和稔(7)・(宗像市) 井手加維子(3)・木村秀明(5)・野上哲子 (甘木市) 佐野 至(7)・酒井カツ子 黒川邦彦(7)・井手 太(7)・井上 清(7) 宮崎春夫(7)・富田英寿(6)・(朝倉郡) 鬼丸碧山(7)・山崎エツ子(7)・(飯塚市) 小山元治(7)・(羽羽 郡) 吉瀬宗雄(7) (大牟田市) 沢村 魁(7)・古賀義朗(7) 西山正昭(3)・古賀邦靖(2)・(筑後市) 中島栄三郎(3)・片桐三郎(4)・平野 巖(4) (北九州市) 豊島 嘉穂(7)・(久留米市) 市丸喜一郎(3)・片桐三郎(4)・平野 巖(4) 庄野陽一(7)・(柳川市) 榊島政信(2) (直方市) 山本利行(5)・鋤田祥子(3) (佐賀県) 甲本達也(7)・(大分県) 寺川泰郎(6)・日本政宏(4)・鳥井裕美子(1) (長崎県) 浦上 健(3)・(熊本県) 濱北哲郎(7)・(山口県) 大塚博久(5) (大阪府) 小山富夫(7)・前田敏也(7) (滋賀県) 辻本雅史(4)・(京都府) 松田 清一(7)・(愛知県) 杉浦五郎(6) 庄野健次(6)・(神奈川県) 中野晶子(7) 大谷英彦(2)・野崎 逸郎(7)・(東京都) 山根ちず子(7)・片桐淳二(5)・田中加代(4) 村山吉廣(3)・大島節子(2)・(千葉県) 森 久(6)・(埼玉県) 関所ひさ(3) (宮城県) 田中信彦(6) 伊藤英邦(1)・(石川県) 丸橋秀雄(6)

協賛会会員(個人)

- 片桐 寛子(福岡) 直登(福岡) 7 早船 正夫(福岡) 7 満 寺(福岡) 7 奥村 宏直(福岡) 7 永田 蘇水(福岡) 6 笠井 徳三(福岡) 6 靖邦(福岡) 6 沖 双葉(福岡) 6 荒木 光正(福岡) 5 梅田 光治(福岡) 5 広瀬 忠(福岡) 4 大里 豊男(福岡) 4 七熊 澄子(福岡) 4 亀井准輔(福岡) 2 滝 栄三(福岡) 3 熊谷 雅(福岡) 2 渡(福岡) 2 上田 満(福岡) 1 小田 一郎(福岡) 2

能古博物館だより

「すず暗い表情として私の方を向き「オーイ 莊山よ訳が分からんねー」私が言うに「どーも致方ないよ。しかしお互い夜盗を働いたことでもなし。気にするな」と。ただ二人共に残念に思っていた。此の時、近辺は大層に騒がしくなったことは事実である。

私共二人は其夜は庄屋源助の家に止められて終夜眠らず夜を明かした。泉州先生の脱走がわかると藩府からは多人数を繰り出して、真木先生追捕に務めたが、幸いに先生は脱走を遂げて薩州に着かれた。其の途中は捕吏が機会をうかがって、先生を捕えようとしたが、先生等の威勢に恐れ逃げられたことを、後に謙三から聞いた。

私共二人は、源助の家から久留米に引き出されたが、多勢の人が捕えられていることを知った。牢の中で根三郎が「牢に入ってから、縄目が取れて楽になったネー」と笑って言った。これで私も気軽に思った。

其時の久留米の騒ぎは非常であった。二、三日後に郁太郎と照三郎が下関で捕えられたことを知った。

その後、私共の吟味が始まった。吟味中は荒庭の上に座らせられて、実に残酷非道であった。棒責め、或

は撃たれるやら、その残忍なること云うにいわれぬ程である。

肩は爛れ打たれること数知らず、根三郎は棒責めのため肩が破れてしまった。

それで豆腐粕を牢番から入手して根三郎を手当てした。

泉州先生は私共に機密らしきことは一切話をされず、そのため白状するにも何事をいうこともなく、ただ眞髓肝要の志は言うことは出来ず、枝葉に類することを返答するだけであつた。

この間に、理兵衛門先生も下関で捕えられて上京を差止められ水田に引き戻されることになった。

其の理由は幽囚預かりの兄(泉州先生)が脱走されたことによる。

理兵衛先生は下関より引き戻される途中の黒崎町原で、網籠の中で切腹された。

次男菅吉および宮崎土太郎が理兵衛先生の遺体を久留米に移したが、すぐに牢役人が死骸を塩漬けにして牢屋の側に置き、家族の遺体引取りに依じてくれず、実に残念であった。

なお、遺体は六十日許も置かれ、そのため理兵衛先生の妻は自分も牢屋住いとなって先生の霊に祭祀された。

薩州の志士に久留米の同志も加わっ

- 石橋 観一(福岡)①・南 誠次郎(春日)⑤
  - 木原 敬吉(飯塚)⑤・奥崎 菊乃(甘木)⑤
  - 坂田 貞治(甘木)②・大久保津智夫(嘉穂)⑤
  - 庄野 直彦(直方)④・原田 國雄(宗像)⑦
  - 森光英子(久留米)③・西喜代松(北九州市)②
  - 永井 功(北九州市)③・本村 康雄(三池)⑥
  - 中山 重夫(唐津)⑤・緒方 益男(佐賀)⑥
  - 七熊 太郎(佐世保)⑦・七熊 正(佐世保)④
  - 浦上 健(長崎)②・山本 稔(広島)①
  - 田中 貞輝(愛媛)①・小堀 定泰(滋賀)③
  - 伊藤 茂(神戸)③・武内隆恭(京都)②
  - 早船 俊隆(東京)⑥・白水 義晴(東京)③
  - 西村 洋美(東京)①・翠川 文子(埼玉)⑥
  - 石野智恵子(東京)③・多々羅節子(千葉)⑥
  - 江崎 正直(東京)⑦・熊谷 豪三(静岡)①
- 会員ご氏名には、会費ご継続七年目をいただいた方、( )は増口数ご負担を示します。

【法人協賛会員および特別協力法人】

- 九州 電力 株・大野 豊(福岡)
- 株・新 出 光・出光 豊(福岡)
- 出光興産福岡支店・山本繁弘(福岡)
- 株・福岡中央銀行・山本敬一郎(福岡)
- 株・福岡 医療 整形 病院・南川勝三(福岡)
- 株・日本南川 外科 工場・白尾嘉弘(福岡)
- 株・日本製粉 福岡工場・村上一(福岡)
- 福岡県警備業協会・村上五一(福岡)
- 流通 共 済 株・花田積夫(福岡)
- タイム社印刷 株・安部博満(福岡)
- 株・笠 組・笠 忠夫(福岡)
- 博多ちくわ 株・魚嘉・松尾嘉助(福岡)
- 権藤 配 理 事務所・権藤成文(福岡)
- 協 通 株・平野孝司(福岡)
- 大牟田 運 送 株・山田 毅(福岡)
- 株・三島設計事務所・三島庄一(福岡)
- 箱 崎 埠 頭 株・小田 一郎(福岡)
- 日 西 物 流 株・原 重則(福岡)
- 西 日 本 急 送 株・原 重則(福岡)
- 愛宕建設工業 株・野村六郎(福岡)
- 東洋特殊機工 株・西尾敏明(福岡)
- 西尾トラック運送 株・西尾秀明(福岡)
- 南愛光ビルサービス 株・野田和禎(福岡)
- 南クリーン 開発 株・野田和禎(福岡)
- 延 壽 産 業 株・池田邦夫(福岡)
- 九州三妻小そう自販 株・宮崎慶一(福岡)
- 南安河内商店 株・安河内紀男(福岡)
- 木原 税 理 事務所・木原敬吉(飯塚)

※新規の御加入(先号以後、平成九年四月三十日現在)は、右の地区ごとに記載いたしておりますので、何卒御芳名を御確認下さい。

友の会 年間3千円  
館の活動、館誌購読と催事企画に参加  
自然と文化の小天地創造

能古博物館の会

協賛会(個人) 年間1万円  
“(法人) 年間3万円  
館維持、資料収集、施設整備等の資金援助を受ける

納入方法 郵便振替 0173019160970  
財団法人 能古博物館  
右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。

図書出版

『閨秀 亀井少栗伝』 詩書、  
で仙厓の次に多いのが同時代の亀井少栗。しかも少栗には艶麗な漢詩の恋歌まである。これが同女の作か否か。これに始まる探究の書である。  
B5版・表紙布装美本  
限定一、〇〇〇部  
収録全カラー50頁・本文94頁  
直売頒価 二、五〇〇円(送料 三八〇円)

『江河万里流る』

九大はもとより東洋諸国の大学教授はじめ、中国哲学専攻又は愛好同士によってさらなる孔子学の歴史と精神が集約された寄稿三十一氏の論文集大成として貴重な文献。また、平易に親しめる儒学精通告。  
B5版・本文32頁  
限定二、〇〇〇部  
直売頒価 二、五〇〇円(送料 三八〇円)

て伏見の寺田屋で京都出兵の用意をしていたので、騒動が始まった。薩州の久光公は、家臣奈良原某に命じ今回の一件は中止させよ。若し君命に應じざるものあらば斬捨てよとのことである。これで、奈良原は此命に従わざるものは直ちに斬ると恐喝した。

右の連中は、寺田屋二階に居り、奈良原の聲を聞くや、一統は階下に入りんとし、これに一方は制して、大騒ぎとなり、二階から降りようとしたものは次々に斬られた。

昔の中国・名宰相晏子の話

現代からおよそ二千五百年前、中国「齊」の国は平和で豊かな国でした。宰相の晏子は、低い身分の家柄に生れながらも宰相にまで出世し、その事績は後の孔子に影響を与えたことで知られる。

一九七二年、山東省銀雀山で発掘された昔の齊の墓から、約五千本の竹筒が出土。この中に、晏子の一生を記したものが発見された。

晏子は宰相としては、きわめて質素な生活で昔の市場に近く小さな家に住んだ。

齊王の景公が、広い家に移ることを勧めたが、晏子は受けなかった。

泉州先生以下、原道太、酒井伝次郎、荒巻羊三郎、中垣健太郎、洲上謙三、古賀簡二、吉武助左衛門、真木菊四郎らは久留米藩に引き渡された。斬られず、久留米藩に引き渡された。これで泉州先生も暫く久留米瀬ノ下の家に帰られた。私も事解けて初めて我が家に帰ることができました。その時分に麻疹が大流行しており私もこの病に罹っていたが水田に帰り、すぐ親類の家に預けられたのですが、古賀簡二には大阪で麻疹に罹り遂に死去しました。(次号につづく)

また、市場に近く居ることよくわかり参考にできると答えている。

また、景公の使者が晏子の家を訪れたとき、食事中であった晏子は自らの食事を半分取り分けて使者に与えた。ところが、その食事は非常に貧しいもので驚いた。使者は、王にそのことを報告。王は俸給を増やそうとしたが、晏子は断った。人は生きるためには、粗末な食事で十分というのである。晏子は、清貧に甘んじ、常に経済に気持を配り人民の利益を考える政治家であった。

また、晏子は直言の政治家で、何度も王を諫めている。景公が広大な

宮殿を造営しようとしたのに、民衆に疲弊を理由に思いとどまらせた話も伝えられる。これらの晏子の行動には確固とした政治信条があり、こうした話は「晏子春秋」という竹筒記録となって残っている。

先代国王の荘公が重臣のクーデターで殺され、その実権を奪われたことがある。晏子は若く、ようやく政界に頭角を見せ始めたばかりであったが、すぐ王宮に駆けつけた。周圉の人びとは、晏子が王に殉ずるか、またクーデターに敵対行動をとるか、と思っ緊張したが、そのどちらでもなかった。晏子は王の遺体の前にひざまずき号泣しただけであった。

晏子は、常々「社稷の臣」という言葉を使った。彼は、王個人に仕えるのではなく、国、つまり社稷に仕える政治家として固い信念をもって離されるべきで、なによりも優先するのは国・民衆の利益であった。

のち、「史記」を著わした司馬遷は、この晏子の行動に感銘を受け、「もし、晏子がいま生きておれば、自分はその御者(いまの自動車運転手)になってもよい」とまで絶賛した。

この名宰相晏子に選ばれる三十年に生まれた孔子は、晏子による秩序が重んじられた周の世にあこがれ、己れの理想とした。

お互い人生を語れる教養と豊かな感性・これに中国哲学が最良

中国哲学講座 (新学期開始)

講座科目：論語・莊子・史記・漢詩  
講師 (右科目順に) 町田三郎 福田 殖

九大名誉教授 石田和夫  
福岡大学教授 森川登美江  
大分大学助教授 森川登美江  
講義日は右科目順に  
毎月第1・2・3・4の各土曜日  
午後一時半開始・三時まで  
(八月は夏休み)

聴講料：各講座年間一万一千円  
(各講座共・3カ年の実績と講評あり)  
期間内に随時入講・また中退可  
(電話申込み可)

能古博物館ご案内

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)  
休館日 毎週月曜  
(月曜日が祝日の場合は次の日)  
12月29日~1月3日  
入館料 大人300円・中高生200円  
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)  
→能古(徒歩5分)→博物館  
〒819 福岡市西区能古522-2  
☎(092) 883-2881・2887  
FAX(092) 883-2881